

早稲田大學東洋哲學會 第三十四回大會

〔日時〕平成二十九年六月十日(土曜日) 午前十時三十分より
〔会場〕早稲田大學文學學術院 三十三號館三階 第一會議室

〈研究發表および講演要旨〉

〔研究發表〕

水の精考——『今昔物語集』卷二十七第五話「冷泉院水精成人形被捕語」と類話を中心に——

崔 鵬偉

『今昔物語集』冷泉院水精成人形被捕語は、冷泉院の池に棲み、人をからかう小柄な水の精が繩で捕まえられる話である。類話として、『宇治拾遺物語』陽成院妖物事「がみえる。同一事件を、『今昔』は水の精が退治される智勇傳と解釋しているのに對し、『宇治拾遺』は人間が水の精に喰われる話としている。兩話の結末がこれだけ異なるのはなぜであろうか。本發表は、『法苑珠林』等に見られる小柄な水の精に注目し、日本と中國の文獻における水の精の解釋の變容を検討しつつ、兩話がいかに作られたのかを明らかにしたい。

范曄『後漢書』の「黨人」評價と六朝時代の「史」

袴田 郁一

范曄『後漢書』は、後漢研究における最も基本的な文獻史料である一方、編纂の過程で生じた誤りに加え、范曄の歴史觀や政治的立場、社會情勢による偏向が少なからず含まれる。本發表は、後漢末に政變で彈壓された「黨人」と呼ばれる士大夫層に對する范曄の敘述と評價を檢討することに、その歴史觀や家學である『春秋』理解にもとづく史學思想、成立の時代背景について考察する。またそれを手がかりとして、六朝時代における「史」のあり方の一端を明らかにすることを旨とするものである。

伊藤仁齋における「誠」と「修爲」

益田 貴裕

仁齋は學者が學問の繼續を通して、その内面性を成長させてゆくことを想定しており、仁齋學における學者の内面の成長過程をたどる研究が必要である。研究は三つの觀點からなされる。第一は仁齋學の背景である。仁齋學の背景には教育者の立場があり、良き師にふさわしい内面性の確立が學者の内面的成長の目標である。第二は「誠」「自ずから」の検討である。内面的成長は「誠」「自ずから」の獲得過程として言い表されている。第三は「本體」「修爲」の検討である。内面性(本體)の成長は道徳的行動(修爲)の繼續で漸次に進むのである。

智顛の教學における病行について

日比 宣仁

『涅槃經』には、菩薩がなすべき病行が説かれる。同行の内容は、同經に詳説されない。よって、『涅槃經』を研究する諸學匠は、病行についての理解をめぐって多様な見解を示す。代表的な見解としては、病行とは菩薩が衆生の病を治す修行であるとするものが挙げられよう。また、釋尊が般涅槃するに当たり背痛を起し、沙羅雙樹の下で横たわったという出來事を病行と見做す立場も見られる。本發表では、このような病行に關する思想背景の中に打ち出された、智顛獨特の病行に對する理解を明らかにする。

中世曹洞宗における五位説の始源について

マルタ・サンヴィド

石川力山氏をはじめ、多くの學者が指摘したように、五位説は中世曹洞宗において大事な位置を占めている。五位説は中國曹洞宗の開祖洞山禪師により創唱されたものであるが、日本中世曹洞宗における五位説の内容が洞山五位から離れ、諸々の門派で独自の解釋が創られた。本發表では、中國曹洞宗五位説の展開を前提とし、日本曹洞宗に流行した『人天眼目』と、それに關わる抄物について考察したい。また、當時の資料を通して五位説の構成を明らかにし、曹洞宗における五位の位置づけを改めて検討したい。

王安石における無爲の思想

梶田 祥嗣

北宋後期、儒者による老莊注の作成は隆盛を極め、なかでも王安石系統のそれは質・量ともに他の儒者はおろか道教徒をも凌いだ。この王安石による老莊への關心は當時から雜駁的であると批判され、先行研究においても儒道合一もしくは三教合一との紋切り型の評價が半ば通説化している。ただ、如上の批判や先行研究は儒道という教派的觀點に拘泥するゆえに、王安石の説く無爲の思想の内實を把握できていないように思われる。そこで本發表では、君權の抑止力という面を中心に王安石における無爲の思想について検証を試みたい。

『列女傳』研究序説——中國近世における流布と受容を中心に——

仙石 知子

前漢の劉向が著した『列女傳』は、前近代中國の女性を規定する教誡書とされる。明代以降に出版された多くの版本は、劉向の原著復原を目指すものと、新たに女性の話を増廣したものに大別される。先行研究は、多く前者のみを対象とするが、池田秀三の言うように『列女傳』が外戚批判の書であるならば、女訓書としての『列女傳』の受容との間には乖離がある。「俗本」と忌避される後者の流布と受容の研究が必要な所以である。本報告は、その序説として『列女傳』の流布と増廣された話の改變の一端を説明するものである。

緣起性に基づく無自性性論證成立の思想的背景に関する一考察

佐藤 晃

竜樹を祖とする中觀派は自説の論證に對し懷疑的であつたが、佛教論理學派の影響の下、一部の論師はそれを行うに至る。無自性性論證はその代表である。八世紀後半の蓮華戒は當該論證の形式を五種に整理し、論證形式化の一到達點とされる。緣起性に基づく論證はその第四に當る。彼はこの論證が竜樹の『中論』諸偈に裏付けられるとするが、この彼の言明は、竜樹の言明を論證と捉えることが同派内で自明でなかつたことを窺わせる。では緣起性に基づく論證は如何なる條件下で成立し得たのか。本發表ではその成立の思想的背景の一端を考察する。

【講演】

『老子』の思想的特質

蜂屋 邦夫

およそ思想には觀察者の立場に立つものと、説得者の立場に立つものがある。『老子』に見られる思想も同じであり、觀察から生まれたとおぼしきものに天地や道の思想、無限大の發見や無や大や水の尊重といったものなどがあり、説得者の立場からの思想には、むしろ、獨特の統治論がある。これらは有機的にどう關連するのであろうか。『老子』に見られるさまざまな思想傾向を、天や法、道や自然その他の概念をもとに解きほぐして、その意義と特質を考えてみたい。